

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要書

論文題目

JSL 児童に対する学級担任の認識は何によって変わるのか

—小学校現場で JSL 児童の支援に携わる学級担任経験者へのインタビュー調査から—

小本 そのみ

2015年3月

第1章 研究の背景と目的

本章では、JSL (Japanese as a Second Language) の子どもに対する学級担任の認識は何によって変わるのかという本研究のテーマに続いて、研究に至る動機や背景、意義、研究目的を述べ、最後に本論文の構成を示した。

まず、研究の背景として、学級担任は、その専門的な学びの機会が無いため、JSL の子どもに対する認識が変わるのが難しいということ、その認識が変わる鍵が、学級担任経験者が JSL の子どもの支援に携わる中にあるということについて述べた。学校現場で JSL の子どもの支援に携わる学級担任経験者の中で見られた変化を起こしたものが分かれば、JSL の子どもに対する学級担任の認識が何によってかわるのかも明らかになると考える。

次に、本研究には、学級担任の JSL の子どもだけでなく全ての子どもに対する認識を深める可能性と、学校現場に良い影響を及ぼす可能性があるという点で、意義があることを述べた。学校教育における日本語教育の重要性を示すことで、学校現場で日本語教育に対する認識が深まり、全ての子どものために学校教育がより良いものとなり得るという点において、日本語教育の分野と学校教育の分野に貢献できるのではないかと考える。

続いて、本研究の目的について、JSL の子どもに対する学級担任の認識に関して、JSL の子どもに対する学級担任の認識を変えるものを明らかにすることだと示し、次の二つのリサーチクエスション (以下「RQ」とする) を設定した。

RQ1 : 学級担任経験者は、JSL の子どもに出会い、その支援に個別的な場面で関わることで、子どもに対する見方や学校現場の捉え方にどのような変化があったのか。

RQ2 : RQ1 の学級担任経験者の変化は、どのようなことに気付いて起きたのか。

第2章 先行文献

本章では、日本語教育学、教育社会学、学校臨床学、異文化間心理学、学校教員の JSL の子どもに関わる研修の先行研究を概観し、最後に本研究の位置づけおよび立場を述べた。

まず、学級担任の変化のきっかけを考える上で、池上 (2004) や川上 (2011) で示された子どもの言語能力を捉えることの必要性やその際の視点を重要と捉え、学級担任経験者の JSL の子どものことばの捉え方に着目することを述べた。その際、学校教員の力量形成への意味付けや現職教員の認識に注目した齋藤・浜田 (2010) の資質能力の獲得などを参考に、教師としての成長の点からも学級担任経験者の変化を捉えることとした。

次に、教育社会学、学校臨床学、異文化間心理学の論考から、一人ひとりの学校教員の

中での変化を詳しく見、子どものことばについてどのようなことを捉えたのかを具体的に示していく必要性を取りあげた。また、学校教員に対する外国人児童生徒についての研修に関する論考から、JSLの子どもの教育に積極的に関わり、自らを高めるという意欲の面でも個人の変化の詳細を見る意味があるとの考えを示した。

最後に、本研究は、川上（2004）で「年少者日本語教育」における問題領域とされる、①「言語発達、言語習得、言語教育理論」、②「教材、教授法、カリキュラム」、③「教育現場、地域、研究者との連携」、④以上3つを取り囲む「教育制度・教育行政、教育支援、教員養成」（p.274）のうち、④「教育制度・教育行政、教育支援、教員養成」の問題領域において、人材育成に関わる側面から、学級担任をJSLの子どもの支援の担い手と考え、その認識に関してアプローチをするという位置づけを示した。石井（2006）の「全ての子どもたちにとってより豊かな学びの機会」を目指すためには、「日本語教育の専門性を備えた教員の育成だけでなく、すべての教員の理解と協力が必要であることを念頭において、教員養成・研修の内容を見直し、充実を図る必要がある」という主張（p.9）を支持し、JSLの子どもに対する学級担任の認識は何によって変わるのかということ进行を明らかにすることは、JSLの子どもだけでなく全ての子どもたちの教育にとってプラスとなり、子どもたちのより良い成長を支えることにつながるという立場を述べた。

第3章 研究の方法

本章では、研究方法の概要、研究対象、研究の過程について述べた。

本研究では、学校現場における日本語教育に携わったことによる学級担任経験者の変化や気付きを見るために、日本語学級設置校の日本語学級担当者であるA教師と、少数散在校において通常の学級で外国からの転入生の支援に携わるB教師という2名の学級担任経験者に対して調査への協力を依頼し、同意を得た。A教師には2013年8月に、B教師には2013年9月に半構造化インタビューを行い、それをデータとした。

分析に当たっては、小学校現場での日本語教育に携わる中で、どのように変化したのか、変化のもとにはどのような気付きがあったのかということ进行を捉えやすいのではないかと考えて、SCAT¹（大谷 2008、2011）の手続きを参考に用いることとした。

¹ 大谷（2008）においては、質的データ分析手法SCATとは、「言語データをセグメント化し、そのそれぞれに、〈1〉データ中の注目すべき語句、〈2〉それぞれを言いかえるためのデータ外の語句、〈3〉それを説明するための語句、〈4〉そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考案して付していく4ステップのコーディングとそのテーマや構成概念を紡いで、ストーリーラインと理論を記述する手続きからなる分析手法である」（p.27）と説明されている。

第4章 分析の結果

本章では、2つのインタビューから、子どもの見方と学校現場の状況の捉え方において、各調査対象者それぞれに分析の結果を記述し、最後に2つの結果のまとめをした。

まず、A教師は、子どもの見方において、子どもの理解可能なことばを意識する必要、日本語と母語とのレベルの差、子どもの理解力と自分の認識との差、子どものことばと育ちの背景との関係、子どものことばの特性を見極める必要などに気付き、ことばの特性を捉える視点に変化があった。また、学校現場の捉え方において、人との関わりと日本語の力との関係性、子どもたちが共に学ぶ大切さ、子どもたちの成長における交流の意義、世界を見ることの大切さ、他者理解につながる言語の多様性に触れる意味などに気付いたことから、他者理解の視点に変化があったことを記述した。

次に、学級担任から学級のサポート担当となったB教師は、ことばによる意思の疎通の限界、子どもの学びの現実、母語による子どもの理解力、文化の違いから来る大変さ、ことばのやりとりができる力などに気付き、子どものことばの成長を捉える視点に変化が見られた。学校現場の捉え方では、当事者のみでの対処の限界、学校組織として支援がないという問題、支援に必要な情報を共有する必要性、学校として問題に取り組む必要、組織としての受け入れ体制の必要性などに気付き、学校組織としての視点に変化があったことを記述した。

最後に、両教師の共通点や相違点を述べた。子どもに対する見方において変化した視点にはことばという共通項があり、変化に関わったテーマ・構成概念には、子どもの母語を含め子どものことばや子どもの言語文化背景に関わる気付きが含まれている。学校現場の捉え方においては、抽出された気付きのテーマ・構成概念に共通なものは見られないが、JSLの子どもとの関わりを通して、学級へ、学校へ、他校へ、教育行政へ、あるいは、世界へと向けて視野を広げているという共通点が見られる。両者とも日本語教育と関わることから得た気付きをもとに視点を変化させ、学校現場を捉え直していることが分かった。

第5章 考察

本章では、RQの答えとその解釈を述べた。

RQ1の答えは次の二つである。学級担任経験者は、①子どもの見方において、子どものことばの特性を捉える視点、子どものことばの成長を捉える視点という、子どものことばに関して、その捉える視点に変化があった。②学校現場の捉え方において、他者理解の視

点、組織としての視点という、周りの人との関係に関する視点に変化があった。

学級担任経験者は、JSL の子どものことばに対する認識や、JSL の子どものことばや文化背景についての理解が深まっただけでなく、他の子どもにも関連付けて考えるようになったという変化があった。そして、子どもの見方が変化を見せたことに関して、在籍学級をはじめ、学校教育全体、あるいは、教育行政、社会や世界を見るという形で視点が広がり、JSL の子どもを取り巻く環境としての学校現場を捉え直すという変化があった。

RQ2 の答えは次の二つである。①学級担任経験者の子どもの見方における視点の変化は、子どものことばの力やその背景の影響に気付いて起きた。②学校現場の捉え方における視点の変化は、ことばと人間関係の結びつきや教師集団の実態と課題に気付いて起きた。

子どもの見方における視点の変化は、主に、学級担任経験者が子どもたちと接する中での実体験や他者からの情報によって、ことばの力やその言語文化背景との関係に気付いて起きたと言える。そして、そのことが、JSL の子どものことばが人間関係に及ぼす影響や、JSL の子どもについて直接関わる当事者だけでなく学校全体で共有する必要に気付いていくことへとつながった。

2名の学級担任経験者が学校現場における日本語教育と関わった過程からは、子どものことばの力やその背景の影響に気付いたことが、JSL の子どもから他の子どもの教育への視点の広がりや学校現場の捉え直しという変化を起こすもとになったと考えられる。教師が、JSL の子どものことばについて考え始めた時、子どもと子ども、教師と子ども、教師と教師、自分を含めた周りの人と人との関係においても改めて考え始めることが想定される。

第6章 結論

本章では、研究目的に対しての結論と今後の課題について述べた。

本研究で明らかになったことは、JSL の子どもに対する学級担任の認識を変えるものは子どものことばの力に対する気付きであるということである。それは、JSL の子どもに対する認識を変えるだけでなく、他の子どもたちに対する認識も変えるという可能性と、全ての子どもの教育に良い影響を及ぼす可能性があることが見出せた。また、JSL の子どもに対する学級担任の認識が変わることが、教師に自分の教育実践や学校現場を捉え直すという変化につながり得ること、それが教師としての成長となり得ることから、学級担任にとって日本語教育という分野が必要なものであることと、学校教育における日本語教育の

重要性を示せた点において、日本語教育分野において貢献できたのではないかと考える。学級担任が JSL の子どもを含めた全ての子どもより良い支援の担い手となり得るための示唆が得られた点では、さらに学校教育にも貢献できたのではないかと考える。

本研究の課題は、JSL の子どもに対する学級担任の認識が変わるための具体的な手がかりまでは明らかにできなかったことと、調査対象者の教職経験について、長い期間学級担任であったことに限定した点である。今後は、職種や立場、教職経験の期間に関わらず、日本語教育との関わりにおける教員の変化や気付きについて、現れ方の細かな点やつながりに注目し、学級担任の JSL の子どもへの認識の変化を起し得るきっかけをより具体的に明らかにしていきたい。

参考文献

池上摩希子 (2004) 「帰国・入国児童生徒の教育問題」水島裕雅編著『講座・日本語教育学第 1 巻 文化の理解と言語の教育』縫部義憲監修 pp.155-175 スリーエーネットワーク

池上摩希子・今澤悌・近田由紀子・内田紀子・齋藤ひろみ (2008) 「学校教育文脈における日本語教育の問い直し—小・中学校の事例から考える年少者日本語教育の方向性と方法—」『2008 年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp.245-255 日本語教育学会

石井恵理子 (2006) 「年少者日本語教育の構築に向けて—子どもの成長を支える言語教育として—」『日本語教育』 128 号 pp.3-12 日本語教育学会

大谷尚 (2008) 「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも運用可能な理論化の手続き—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』 第 54 巻第 2 号 pp.27-44 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

川上郁雄 (2011) 『「移動する子どもたち」のことばの教育学』くろしお出版

齋藤ひろみ・浜田麻里 (2010) 「学校教員の「多様な言語背景をもつ子どもたちへの教育」の力量形成の過程—教育経験の異なる教員へのインタビュー調査から—」『日本語教育学会春季大会予稿集』 2010 年度 pp.341-342 日本語教育学会

浜田麻里・市瀬智紀・徳井厚子・金田智子・齋藤ひろみ (2009) 「多様な言語背景をもつ子どもたちへの日本語教育に携わる教員および教員養成系大学の学生の認識」『日本語教育学会秋季大会予稿集』 2009 年度 pp.33-42 日本語教育学会